地域情報（県別）

「患者の孤独感を和らげる存在になりたい」－地域向け交流カフェを開く田那村内科小児科医院の田那村雅子副院長に聞く◆Vol.2

2019年3月13日 (水)配信 m3.com地域版

「患者さんの中には孤独感を抱える人が少なくないのでは」。「田那村内科小児科医院」（千葉市中央区）の田那村雅子副院長が地域に向けた交流カフェや健康教室を開いている背景には、日々の診療を通して感じるようになった問題意識があった。「自分で一歩を踏み出せない人の背中をそっと押してあげたい」と話す田那村副院長の思いとは。（2019年2月4日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

――クリニックの中とは思いづらい雰囲気ですよね。内装を整える上ではどんなことに心を配りましたか？

利用者の方がくつろげる、どこか大人な雰囲気が漂うものにしたい思いがありました。ご高齢者向けのサロンって、事務所の中に長机が並んでいて、そこを蛍光灯の白っぽい光が照らしているイメージがあったんです。それだと少し硬い印象を受ける人がいるだろうと思ったので、フローリングのようなデザインのビニールタイルを敷いてソファを並べ、照明も柔らかな色合いのものを選びました。また、ご高齢の方の中には床に直に座る方が落ち着く人もいるだろうと思い、テーブルとクッションを置いた小上がりのようなスペースも設けました。健康に関する本を並べ、インターネットも使えるようにパソコンも備えました。

田那村雅子副院長

――クリニックの余剰スペースを地域向けに活用しようと思ったとのことですが、すぐに「みんなのカフェ」や「健康教室」の構想が浮かんだのでしょうか。

いえ、2004年ごろから地域に向けたオープンな場所にはしていたのですが、実際には感染していない患者さんの待合スペースとしてしか利用されていませんでした。私としては、お茶を飲むためだったり、読書やパソコンを使った調べものをするためだったりといったように自由に使える賑わいの場所になればいいなと思っていたのですが、そのイメージは自分の胸に留まっていて、周知をしていなかったんです。

地域向けに稼働し始めたのは健康教室を開始した2010年に入った頃からです。定期的な運動は健康のためにとても重要ですが、自力でジムに通うなどしてその習慣をつくることのできる人はごく一部。そんな中で、「クリニックの中でも健康に関する教室を開いていますよ」と患者さんに案内すれば、「知っている医師の勧めだし」「場所は知っているし」「スタッフも知っている人だし」といった理由でハードルが低くなるだろうと考えました。

――確かに通っているクリニックで行っていると聞けば参加しやすいかもしれないですね。みんなのカフェはどうやって思いついたのでしょう。

人と接する機会が少ないけど賑やかな雰囲気の中にいるのが好きだったり、話すのは得意じゃないけど一人でいるよりは人の集まりの中にいたいと思っていたりする人っていると思うんですね。日々いろんな患者さんと接していると、孤独感を抱えている方が少なくないと実感します。例えば過去に、一人暮らしのご高齢の患者さんでちょっとした不調ですぐに救急車を呼んでしまう方がいました。不要な救急搬送は社会問題になっていますが、一人暮らしで頼れる人が近くにいなくて不安感が増して、自分の異変に過剰に敏感になってしまう人もいるわけです。

診療時間内であればいつでも利用できるという交流スペース

――孤独感を抱えている人のためにもなりたいと。

はい。人が集まる場所はたくさんあります。例えば介護保険を使ってのデイサービスだったり、公民館などの公共施設で開かれている習い事などの教室だったり。そんな場所に能動的に行ける人であればいいのですが、そうできない人もいるわけで。健康教室とみんなのカフェの開催の背景に共通しているのは「自分で一歩を踏み出せない人の背中をそっと押したい」という思いです。

また、デイサービスだと「お世話をする人」「お世話をされる人」という構図になりがちで、認知症などの病気が進んでいない人の中には自分がサービスを施されている感じを受けることを快く思わない方もいらっしゃいます。ですから、みんなのカフェが、デイサービスのように完全なサービスではなく、街中にある商業カフェのように完全に放置されるわけでもない、その中間のような存在になれればいいなと思いました。背中を押しつつも、大人を大人としてみて接したいなと。内装を整える上で「大人の雰囲気にしたかった」のはこういった思いがあったからです。

――先生の問題意識が根にあったわけですね。それでみんなのカフェの構想が固まっていったと。

はい。医師の仕事を通して生まれた問題意識に加えて、新聞や雑誌などで地域のいろんな人が集う「コミュニティカフェ」が増えていることを知って、現実化に動き出しました。コミュニティカフェを開くためのノウハウを学ぶ講座を千葉市が開いていたのでスタッフに参加してもらって情報を集め、2017年にスタート。その後は口頭だけでなくポスターを掲示したりチラシを配ったりして案内するほか、ホームページへの掲載やみんなのカフェ専用のフェイスブックアカウントを作ってネット上でも情報を流すようにしました。また、一人暮らしのご高齢の方など、みんなのカフェがあることを喜んでくれるかもしれないと思う患者さんにもスタッフが手書きのメッセージを添えて開催前にはがきを送ってくれています。

――手書きのはがきまで。医療機関の経営だけを切り取って「マイナス」とは考えないのでしょうか。

確かにスタッフの労力を割いているので、経営状況が芳しくなければここまでやっていないかもしれません。でも、みんなのカフェと健康教室は当院のコンセプトを実現するための手立ての一つになり得ると考えています。当院は単に病気を治すことを目的にはしていなくて、患者さんのいろんな困りごとを解決する、または解決につなげられる存在でありたいと考えています。孤独感や寂しさが体の不調につながっているかもしれない人がいればみんなのカフェをご紹介できますし、当日は私が参加者の方の健康に関するご相談にも乗っています。

医療費が増え続ける中で、患者さんを医療機関だけではなく地域で一体的に支える地域包括ケアは私も必要だと思います。ただ、在宅医療における多職種連携など国が推奨する定型的なものだけでは不十分ではないでしょうか。医療や福祉といった業界に限らず、各々が持っている資源を生かして、人と人をつなぐ場を網の目のように広げていくことが必要だと考えています。

3階は現在、「待合」「みんなのカフェ」「健康教室」の3つに活用していますが、今後はもっと自由に使っていただきたいですね。イベントがある日だけではなく診療時間内であればいつでも気軽に来ていただきたいですし、老若男女は問いません。例えば放課後に一人で過ごすのがつまらないと感じている子どもにも使ってほしいですし、公的な活動をするために場所を借りたいといったご要望も歓迎です。私達の方でも、他に地域のためになる使い方がないか考えていきたいです。

◆ 田那村雅子（たなむら まさこ）氏

1994年に東京慈恵会医科大学を卒業後、東京慈恵会医科大学附属病院に勤務。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の研修で難民キャンプでの診療も経験。また社会学に興味を持ち、早稲田大学社会科学部に学士編入・卒業。2000年から夫の両親が開設した「田那村内科小児科医院」の診療に加わり、現在は副院長として勤務。「何でも相談に乗る身近な家庭医」がモットー。

取材・文=医療ライター庄部勇太

記事検索

ニュース・医療維新を検索